

武藏野日曜集会

天来の使者

——ヨハネ伝第8章21～30節——

1994年12月11日
小池辰雄

我は上より出づ 靈現の世界 天来の使者

【ヨハネ8・21～30】

²¹斯^{かく}てまた人々に言い給う『われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己^{おの}が罪のうちに死なん、わが往くところに汝ら来ること能わづ』²² ユダヤ人ら言う『わが往く処に汝ら来ること能わづ』と云えるは、自殺せんとてか』²³ イエス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我はこの世より出でず。²⁴ 之によりて我なんじらは己^{おの}が罪のうちに死なんと云えるなり。汝等もし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』²⁵ 彼ら言う『なんじは誰なるか』イエス言い給う『われは正^{まさ}しく汝らに告げ來りし所の者なり。²⁶ われ汝らに就きて語るべきこと審くこと多し、而して我を遣し給いし者は真なり、我は彼に聽きしその事を世に告ぐるなり』²⁷ これは父をきして言い給えるを、彼らは悟^{さと}らざりき。²⁸ 爰にイエス言い給う『なんじら人の子を挙げしのち、我の夫なるを知り、又わが己^{おの}によりて何事をも為さず、ただ父の我に教え給いしごとく、此等のことを語りたるを知らん。²⁹ 我を遣し給いし者は、我とともに在す。我つねに御意^{みこと}に適^{かな}うことを行うによりて、我を獨^{ひとり}おき給わづ』³⁰ 此等のことを語り給えるとき、多くの人々イエスを信じたり。

●我は上より出づ

聖書で——旧約聖書からずつとですが——「知る」という言葉は知的に知ることではない。全人格的に受けとることを「知る」という。いわゆる頭で知るではない。

今日はヨハネ伝8章21節から『天来の使者』と題してお話をします。「天来の使者」とはキリストのことです。

²¹斯^{かく}てまた人々に言い給う『われ往く、なんじら我を尋ねん。されど己^{おの}が罪のうちに死なん、わが往くところに汝ら来ること能わづ』²² ユダヤ人ら言う『わが往く処に汝ら来ること能わづ』と云えるは、自殺せんとてか』²³ イエス『わが往く処に汝ら来ること能わづ』と云えるは、自殺せんとてか』²⁴ イエス



ス言い給う『なんじらは下より出で、我は上より出づ、汝らは此の世より出で、我はこの世より出でず。

「我は上より出づ」

という。キリストは「自分は上から出てきた者だ」という。彼は時間的にも、

「我はアブラハムよりも先にありしなり」

と別なところで言つておられる。

「お前さんはアブラハムを見たのか？」

なんて、馬鹿な質問をするユダヤ人がいた。そのことは57節に出ている。イエスの自覚は、神と共に歴史の初めから、歴史以前から居られるという凄い自覚です。永遠者です。そして、歴史上に現れた。ナザレのイエスとして我々と同じ人間の姿で出現した。そんなことの言えるひとはキリストの他にいない。だから、もちろん普通の人間ではないわけです。

イエスの生まれた頃のローマの皇帝はアウグストゥスですが、これはその世界の第一人者といわれる。ところが、キリストは第一人者でもない、これは唯一者です。一、二と数えることができない、順序の中に入つてない、唯一の例外者です。アブラハムよりも先に神と共にいたひとがナザレのイエスとして現れた。キリストの降誕というのは大変なことです。そういう靈的な存在が我々と同じ姿で現れた。同じ姿で現れたけれども、彼には聖靈が宿つている。聖靈が宿つているから、その言うこと為すことがケタが違う。

「自分が今度は天界に行つたら、お前たち、祈つて待つていろ。聖靈がやつて来る

から。そうしたら、私の言つたり為したことが本当の意味で分かるぞ」

と、終りの方でキリストは言われた。だから、聖靈を受けなければ、キリストの言葉は本当は受けとれない。キリストの行為も受けとれない。

普通はよく「聖書の研究」といつて、一生懸命に研究している。研究なんかで聖書は読めるものではない。これは御靈の光でもつて読まなければ読めない。御靈の光の土台は十字架です。キリストの十字架の贖いを本当に受けなければ聖靈はこない。十字架と聖靈は分けることができません。これは必ず、その土台と完成ということになる。十字架・聖靈、それから再臨となる。

だから、

「我は上より出づ」

という。「上より出づ」なんて言つたつて、彼らは分からぬ。「上」というのはただ空間的な上ではない。次元的な上から、絶対次元からやつてきたということです。ただ

「空から來た」

ということです。

「この世から出たのではない」



イエスはマリヤから生まれたが、マリヤは聖靈の力によつてイエスを産んだわけです。特別な現われ方をした。そういうことは普通のクリスチヤンでも本当は分かつてない。

「イエスのお父さんはヨセフで、ヨセフとマリヤから生まれた」

と、そのくらいに思つてゐるだけのはなしだ。ところが、イエスはそうではない。聖靈によつてマリヤを通して現れてきた。これが

「我は上より出づ」

ということ、靈界からやつてきたということです。

●靈現の世界

²⁴之によりて我なんじらは己が罪のうちに死なんと云えるなり。汝等もし我の夫なるを信ぜずば、罪のうちに死ぬべし』

我々はキリストを受けとらないと「罪のうちに死ぬ」というわけだ。肉体は罪のうちに滅びます。これはパウロがローマ書8章で言つてゐるとおりです。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらることなし。みんなキリストが十字架で引き受けてしまつたから、無罪にされている。

²キリスト・イエスに在る生命の御靈の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。

この言葉です。十字架を土台をした御靈の法則が罪と死との法則から解き放して、罪にも死にも支配されなくなつたということです。「肉」とパウロが言つてゐるのは生まれつきの我々の在り方のことです。「靈」というのは御靈に在つての在り方です。

⁹然れど神の御靈なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで靈に居る。

キリストの御靈なき者はキリストに属する者にあらず。……

¹¹若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御靈なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御靈によりて汝らの死ぬべき体からだをも活かし給わん。

と凄いことを言つてゐる。そういうこともあるぞと。肉体が滅びても、いわゆる死ぬのではない。正に往きて生きる往生です。新しい靈体をいただいて生きるんです。これもパウロがローマ書で言つてゐるとおりです。

³⁷然れど凡てこれら的事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。^{あまり}³⁸われ確く信す、死も生命も、

いわゆる相対的な「死も生命」も、

御使も、權威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。」(ロマ8・1…39)



これは聖靈の愛、キリストの愛です。だから、十字架にかかつて贖罪をしたあと、キリストは必ず靈体として現れるわけです。キリストの「復活」というのは靈体として現れることです。あの復活という言葉は復た活き返つたということではない。復活という言葉は躋きになる。キリストは靈体として現れた。キリストはいつまでも靈体として生きておられる。私は夢の中でそういつたキリストにでつくわすことが時たまある。それは凄い。もう、平伏してしまう。夢の現実というのは凄いよ。夢の中の現実は普通の現実以上です。いわゆる夢ではない。もう、ありがたくてね。

だから、我々は

「十字架を受けとつて、贖罪を受けとつて、聖靈を受ける」

というと、これが新しき生命、新生なんです。本当の新しい生命です。この新しい生命は古びない。新しいものはよく古くなる。ところが、この新しいのは古びない。いつまでも新しい。そういうものはこの人間の相対界にはない。本当の新人になる。十字架を受けとつて聖靈を受けとつた人は、本当の新人だ。内側は本当の新人です、外側は普通の人と同じようだけれども。

私は「信仰」なんていう言葉は嫌いだ。なにも、信じ仰いでいるのではない。現実なんです、靈的現実です。靈の現^{あらわ}、靈現なんです。靈的なうつつの世界、靈現の世界です。

●天来の使者

私はキリストのことを「無者」と言つてゐる。自分を何者ともしない。我々も十字架の贖いで、罪からゼロにされている。我々も無者なんだ。無者は聖靈を受けとると、これは無限無量者です。「無即無限無量」とはそのことなんです。本当の無者は無限無量者です。普通は、そんなことは言わないね。キリスト教界にもそんなことを言う人はほとんど無いのではないか。佐古純一郎氏が私の『無者キリスト』を読んで、

「真に大胆なキリスト告白だ」

と言つて驚いた。柳田邦男氏も私のことを驚いた。一遍、テレビで一席やりたいくらいに私は思うんだ、

「本当の世界は、キリストの直弟子の次元はこういうものだ」ということを。

「靈界から」ということが「上より」ということです。

「自分は靈界から遣わされた者だ」

ということ。キリストは被派遣者なんだ。これが「遣わされたる者」です。ここに「遣わされた」という言葉がよく出てくる。天界から送られてきた者、天来の使者であるということです。

²⁹我を遣し給いし者は、我とともに在す。我つねに御意に適うことを行ふに



よりて、我を獨ひとりおき給わず』
キリストは神さまの命令通りに動いている。

「本当のクリスチヤンは奴隸だ」

とマルティン・ルツターも言っている。神さまの言うことを、キリストの言うことを無条件に受けとつて動いているもの、それを奴隸と言った。奴隸というのは余り感心しない言葉だけれども。ところが、この一番不自由な奴隸が一番自由なんです。本当の自由は、御意によつて動いている者が本当の自由です。自分勝手に動いているのは本当の自由ではない。それは自己に捕らわれている。人間は、普通は大いに自由だと言つてゐるけれども、自己」というものに拘束されているからダメなんです。自己に捕らわれているのを、身勝手にやつてゐることを、それを自由だと言うけれども、それは本当の自由ではない。本当の自由は、自分を棄てて、神さまの、キリストの御意のままに動いているのが本当の自由です。ゲーテもどこかでそんなことを言つていたよ、

「普通の人は自由がわかつてゐない。自分勝手にしているのは、自己に捕らわれて
いる」

と。己を棄ててかかつて、神さまの無限無量の自由自在な御意に従つてゐるのが、本当の自由だ。大きな風にのつて飛んでいる鳥のようなものだ。鳥が自由なんです。鳥というものは素晴らしい。風にうまく乗つて自由自在に動いている。鳥自身にはひとつもあちらこちらに行く力はないのだけれども。風のないときには、鳥は自分の羽でもつて一生懸命にやるけれども、それではくたびれてしまう。ところが、風にのつてゐるときには楽なんだ。それが本当の自由です。

だから、無者であることが無限無量者である。何も無いことが一番豊かなことになる。
「無一物無尽蔵」

というのがそのことなんです。大自然と一つになつてゐる。人間は、文明人はいろいろなものを作りして作つたり壊したりしてゐるけれども、そんなものはひとつも要らない。キリストはやはりそういうことをちゃんと分かつて仰つてゐる。マタイ伝の始めの方にでている。

「さいわい惠福なるかな、靈の貧しき者、天国はその人のものなり」
というこの言葉にちゃんと入つてゐる。惠福なるかな、靈の貧しい者——

「私は何もありません」

という——それが実は、天国はその人のものである。天国的な現実は実はそういう人のものだという。

「さいわい惠福なるかな、悲しむ者、その人は慰められん。

惠福なるかな、柔和なる者、その人は地をつがん」

これは凄い言葉だね。みんなこれは



「神・キリストがそのバツクにいるから何も心配は要らんよ」というわけです。

「義に渴く者、その人は飽くことを得ん」

大変な言葉だね。やはり、これは人間の思想ではない。いわゆる思想の言葉ではない。靈的現実から逆りでてくるところの言葉です。

「私を受けとれば、お前たちは世の光だ。

私を受けとれば、お前たちは地の塩だ」

と書いてある。靈的な權威のある言葉です。教えではない。だから、「キリスト教」という言葉は嫌いなんだ。キリストは全部、本当のことを告白している。教えているのではない。自分の体験していることを言っているだけの話です。その告白に打たれるんです。私の話も全部これは告白です。あなた方に教えているのではない。

ゲーテは、

「自分の文学は全部、告白だ。頭で書いていない。頭でものを言つてない。頭、
全身的な告白だ」

と言つた。さすがはゲーテだ。だから、ゲーテの文学は凄い。トルストイでもドストエフスキーでもユゴーでもみなそうです。第一級の文人はそうです。あるいは超一級と言つてもいい。そういうことになると、漱石さんなんかを読んでみると、どうも底力が足りない。底力というのは、そういう靈的な力ですから。漱石さんあたりはきれいな文学だけれども、もうひとつそこからの底光がない。

キリストは遣わされたる者、神さまの奴隸だという。ルツターが言つたとおり、クリスチヤンは「神の奴隸」である。ところが、奴隸が一番自由だ。そういう逆説的な真理が普通の人には分からぬ。みな自我がたつてゐるから。自我におけるところの自由なんか、自己に捕らわれてゐる。

キリストは正に神さまの特命全權大使だよ。遣わされたる者です。大変なひとです。自由自在に彼が言つてゐるのは全部、神さまからきているところの神意、神言である。神意、神言、神行、そういうのがキリストに現れてゐる。彼は遣わされた者だから。神さまの奴隸だから。ルツターが『奴隸論』を書いたら、エラスムスが『自由論』を書いた。ところが、エラスムスの「自由」はダメなんです。ルツターの「奴隸論」が本当なんです。これが本当の自由なんです。さすがはルツターだ。

身をもつて行じていつたところの本当の自由者はアッシジのフランチエスコです。これは凄いね。私は非常に尊敬してゐます。全部、神・キリストの意志で動いてゐる。ローマ法王をひとつも恐れないので、はつきりとものを言つた。ルツターも、

「もし地獄があるとするとならば、それはローマの下にある」



かたまりだと。ルッターはローマの方に向かつて行つたときにそういうことを言つた。階段（スカラ・サンタの二十八階段）を登つてゐる時にルッターは途中でやめて下りてしまつた。
 無となると無限無量だから、
 「ナッシング・イズ・オール」
 「ニッヒツ・イスト・アッレス」と言つていい。

「何も無いことが一切だ」ということです。遣わされたる者が、奴隸が実は最大の自由であるという。神さまの靈的な風にのつかつて動いているのが一番自由だということです。その通りです。
 だから、我々は本当の自由をいただいているわけです。何も卑屈になる必要はない。樂でしようがない、力が来てしようがない。そういう境地で葉書でも手紙でも書いてごらんなさい。受けとつた人が本当の意味で喜んでしまうから。お世辞なんかひとつも要らない。

